

バルテュス《猫と鏡Ⅲ》(1989～94年)にみる 写真利用

関西学院大学
松野敬文

バルテュスは1908年に生まれ、2001年にスイス、ロシニエールの住居で没した。そのさい、2000点余りのカラー・ポラロイド写真が未整理のまま残された。ポーズをとるモデルの少女、犬や猫、屋内や静物、近隣の風景、制作中のタブローなどをとらえたこれらの写真は、画家自身の言によれば、老齢により困難となったデッサンの代わりとして用いられたものである。その一部は2013年、『最後の習作』という題名で出版された。

本発表では、この新たに開示された資料をもとに、晩年の油彩画《猫と鏡Ⅲ》(1989～94年)の再検討を試みる。1977年から80年にかけて描かれた第1作、1986年から89年の第2作に続く、《猫と鏡》連作の第3ヴァージョンである本作に対して、先行研究は不足している。作品評価も毀誉褒貶相半ばする。レマリーは同作を《猫と鏡》連作中「最大で、最高のもの」とし、バルは少女にも少年にもみえる人物像の両義性を指摘した上で、赤と緑の「輝く色彩」を賞賛する。一方で、画家のアトリエを訪問し、制作中からこのタブローを目にしていたウィーバーは、手厳しい評価を下す。彼によれば、「子どもの身体の歪み」は年老いたバルテュスが、その絵筆を満足にふるえなくなった証左である。

画家は、ポラロイド写真の活用を1992年に開始した。翌年には篠山紀信により、その事実は報告された。しかし、晩年のタブローを「習作」写真の存在を踏まえた上で論じた先行研究は、ほとんど見受けられない。作品理解のためには、完成作と写真との関係を明らかにしておく必要がある。だが、そもそもこれらの写真は、制作のための有益な手段になることができていたのだろうか。手段と目的は、実は逆転していたのではないか。

本発表は、以上の問題提起から出発し、以下のような手続を経る。最初に、《猫と鏡》連作の変遷をたどり、第3ヴァージョンの独自性を明らかにする。次に、第3ヴァージョンの人物や猫、ソファ等の事物をその形態や色彩、構図上の配置といった多角的な見地から、詳細に分析する。そのさいには、『最後の習作』掲載のポラロイド写真と、篠山が撮影した同時期のアトリエ写真(1993年に出版)を有効に活用する。そうして導き出される結論は、以下の通りである。バルテュスは晩年、作品への写真利用を進めていた。だがその行為は、少なくとも《猫と鏡Ⅲ》においては、タブローの出来不出来にほとんど影響していない。とはいえ、少女ヌードを撮影することが、そのまま画家のポルノグラフィ的興味を満たす行為であると断じる証拠は、開示された資料の中には存在しない。そうではなく、ポラロイド写真を撮ること自体が、バルテュスにとって、作品の新しい制作形態となっていたのではないか。